# 『オセロ』―デズデモーナの白いハンカチ

石井　美樹子

## エリザベス女王の廷臣が手にする白いハンカチ

いま、わたしの目のまえには、エリザベス一世の廷臣たちの肖像画のコピーが置かれている。「ピエル・ドミニクル」（一五五八年、ピーテル・プルブウス作、個人蔵、図1）、「第四代ノーフォーク公爵トマス・ハワード」（一五六三年、作者不詳、個人蔵、図2）、「第一代レスター伯爵ロバート・ダドリー」（一五六四年、作者不詳、個人蔵[1]、図3）、「ニコラス・スロックモートン卿」（一五六二年頃、作者不詳、ロンドン、ナショナル・ポートレイト・ギャラリー蔵、図4）、そして「ダンリー卿ヘンリー・スチュアートと弟チャールズ」（一五六三年、ハンス・エワース作、イギリス王室蔵[2]、図5）。ピエル・ドミニクルが何者かは不明だが、ノーフォーク公爵はイギリス筆頭貴族、レスター伯爵は女王の寵臣で主馬頭（しゅめがしら）、スロックモートン卿は女王の第一代フランス駐在イギリス大使である。三人ともに、女王の側近中の側近。ダーンリー卿の肖像画を除いて、四作品の肖像画の構図、人物のポースはいずれも同じようで、四人とも、腰のベルトにさげたポシェットの口を開け、白いハンカチを見せびらかしている。ピエル・ドミニクルとノーフォーク公爵とレスター伯爵は白いハンカチ

図1

図2

に右手をそっと添えている。弟と並んで立つダンリー卿ヘンリーは左手に手袋と白いハンカチをしっかり握っている。ダンリー卿は後に、スコットランド女王メアリーの二番目の夫となる人物である。エリザベス女王の五人の臣下たちが、たまたま同じポーズを取り、たまたまハンカチをみせびらかしたり、しっかり握っているとは思えない。

白いハンカチを手にする人物の肖像画は一五六〇年代に集中して制作されている。中世・ルネサンスの西洋絵画では、絵画のなかのモチーフは必ずなにかを象徴する。この白いハンカチは何を意味するのであろうか。

ノーフォーク公爵とレスター伯爵の肖像画が制作されてから、一、二年後の一五六五年三月、女王の滞在する、ロンドン郊外のハンプトンコート宮殿で、次ぎのような事件が起きた。

ハンプトン・コート宮殿のテニス・コートで、レス

図 4

図 3

ター伯爵とノーフォーク公爵が、女王の御前で、テニスに興じた。早春とはいえ、汗ばむほどの気候。春の太陽が淡い黄金色の光を斜めに投げかけ、四方から春風が通っていた。試合の合間に、大汗をかいたレスター伯爵は足早に女王に近づくと、いきなり女王の手からハンカチをひったくり、それで顔を拭いた。ノーフォーク公爵は激怒した。「なんと無礼な（too saucy）、このラケットでその顔をぶったたいてやりたい！」それから、罵りあいの大喧嘩になる。この出来事を、スコットランド女王メアリー・スチュアートの大使トマス・ランドルフが目撃し、祖国に書き送ったことから有名な事件になる。

女王はレスター伯爵にハンカチをひったくられて、なぜ黙っていたのか、なぜ、ノーフォーク公爵がハンカチごときでこれほど激怒したのか。それが分かれば、シェイクスピア作『オセロ』のデズデモーナのハンカチにこめられた意味と謎を解くことができる。そのま

えに、まず、まずレスター伯爵のことを語ろう。

## 三代にわたる反逆者を出した家

一五五九年一月十五日にウェストミンスター大聖堂でエリザベス女王が戴冠してから三か月後、にわかにひとりの男の名が浮上する。ウェストミンスター大聖堂に向かう戴冠式の行列で、女王の白馬の手綱をひき、女王の輿にぴったり寄り添い、護衛にあたったロバート・ダドリーである。ロバート・ダドリーは一千五百ポンドの年収を伴う主馬頭に抜擢されたのみならず、ロンドン近郊のキューに屋敷をひとつ、他に、取り壊しになった修道院の跡地をいくつかあたえられた。女官や宮廷付き画家の年収が三十ポンドほどの時代に、一千五百ポンドという年収がいかに法外な額であったか想像に難くない。宮廷人たちはロバートの異例の昇進に度肝を抜かれ、奇異の目を投げかけた。ロバートが反逆者の家の子だったからである。ロバートの父ジョン・ダドリーは、エリザベスの弟エドワード六世の逝去直後に、ジェーン・グレイ（ヘンリー八世妹メアリーの娘でエリザベス女王には従姉にあたるフランセス・グレイの娘）を女王に擁立したものの、ヘンリー八世の長女メアリー一世に破れて処刑された。このときロバートは父に味方したとして死刑の判決を受け、ロンドン搭に投獄された。祖

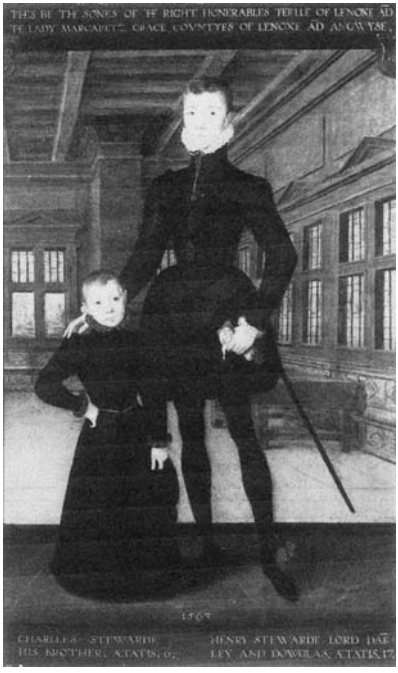


図5

父エドマンド・ダドリーは辣腕の徴税吏だったが、苛酷なまでの税の取りたてのために、貴族からも国民からも嫌われた。ヘンリー八世は一五〇九年に即位するやいなや、人気取りのためにエドマンド・ダドリーを処刑した。

ロバート・ダドリーは、女王の寵愛を武器に、枢密院委員以上の権力を誇るようになる。レスター伯爵に対抗できるのは、女王の絶対的な信頼を得ている国務長官ウィリアム・セシルと、イギリスで唯一の公爵トマス・ハワードだけだった。外国の大使たちは、女王にとりなしてもらおうとロバート・ダドリーに近づき、しのぎを削った。スペイン国王フェリペ二世の大使フェリア伯爵ドン・ゴメス・スアレスは、ロバートと女王の仲をいち早く察知し、一五五九年四月に次ぎのような手紙をフェリペ王に書いている。

> この数週間というもの、ロバート卿は女王の大いなる寵愛を勝ちえ、我がもの顔で宮廷を牛耳っています。女王は昼となく夜となく、ロバートの部屋を訪れていると噂されています。人びとはこのことをおおぴらに噂し、女王は、片方の乳房を患っているロバートの妻が亡くなるのをひたすら待っており、ロバートと結婚するつもりだと言っています。このような状況ですので、ロバートに近づき、陛下の援助と愛顧を申し出て、ロバートを味方に引き入れるのは良策だと思います。(3)

この手紙が書かれてから五日後の四月二十三日、聖ジョージの祝日に、ロバートはガーター勲士に叙された。ロバートがガーター勲士に叙されたとき、父ジョン・ダドリーが処刑されてから五年しか経っておらず、ロバ

ートの昇進に高位貴族たちは眉をつりあげた。反逆罪で処刑された祖父と父を持ち、みずからもメアリー一世に投獄されて死刑を言い渡されたロバートを、女王でさえも「三代にわたる反逆の徒」（traitors three descents）[4]と呼んではばからなかった。

ロバートと一緒にガーター勲士に叙されたのは、ノーフォーク公爵、ノーサンプトン侯爵ウィリアム・パー（亡きヘンリー八世の六番目の妃キャサリン・パーの弟）、ラトランド伯爵ジョン・マナーズの三人、三人とも名門の出である。ノーフォーク公爵は「成り上がり者」のロバートと一緒にされて憤慨した。

さらに、ロバートはウィンザー城警備隊長に任命され、実入りのよい毛織物輸出税を独占する許可状まであたえられた。後には、もっとも実入りのよい甘葡萄酒の輸入関税の独占権まであたえられる。この時代、輸入品の直売は許されず、独占権を得た者の手で取り扱う仕組みになっていた。輸入品をいくらで買おうと、輸入した品をいくらで売ろうと、独占権を持つ者の手に委ねられ、民衆の生活はそれに左右された。

女王の寵愛を受けて権勢を強めるロバート・ダドリーは宮廷人の羨望と敵意のまとになる。ノーフォーク公爵はロバートと一緒にガーター勲士に叙されて同等の扱いを受けただけでも自尊心が傷つけられたのに、ロバートが女王の傍らに常にはべり、女王の亭主気どりでいるのは耐え難かった。「成り上がり者」は妻帯していた。にもかかわらず、女王と結婚して「王」になろうとしている。ノーフォーク公爵はロバートへの敵意を隠そうとしなかった。公爵はロバートに「自惚れと僭越な行為をやめなければ、寝床で死ぬことはできない」と警告した。[5]宮廷はノーフォーク公爵とロバート・ダドリーの二派に分かれ、亀裂はますます激しくなっていった。

## ロバートの妻エミーの怪死

一五六〇年九月九日、ロバートの妻エミー・ロブサートが突然死した。エミーはオックスフォード近郊アビントンの豪壮な屋敷で暮らしていたが、使用人たちがアビントンの市に出掛けているあいだに、二階の階段の踊り場から転落して即死した。検視の結果、事故死と発表されたが、女王との結婚を望むロバートが間接に手をくだしたという噂が広まり、外国の大使たちは色めきだち、この事件を「怪死事件」として本国に報告した。パリ駐在のイギリス大使ニコラス・スロックモートンは国務長官ウィリアム・セシルに、フランスの宮廷はエミーの突然死の話でもちきりで、尾ひれをつけて面白半分に語られている、イギリス女王は嘲笑され、下手人のごとく軽蔑され、信用を失っていると述べてから、落ち着いた口調でこう言っている。「悪いことは一度ですまない、この残酷な事件が、国家にさらなる厄をもたらさないように祈っている。」[6] しかし、心を許せる友人のノーサンプトン侯爵ウィリアム・パーには、本心をさらけ出している。エリザベス女王に関して、不名誉で下品な噂話が広がっており、女王のことが話題になるたびに、スロックモートンの頭は総毛だち、耳は言も聞きもらすまいと大きくなる。女王の悪口を耳にしなくてすむように、死ぬか、さもなくば、どこかに身を隠していたい、あるフランス人は、臣下が妻を殺したのに女王は見てみぬふりをし、その臣下と結婚しようとしている、なんという国なのかと声高に罵った、イギリス女王にたいする誹謗を耳にするたびに、スロックモートンは、心臓から血が噴き出すような屈辱感を覚える。[7]

それと口にしなくとも、だれもが神が手をくだし、女王とロバートの結婚を阻止したと考えた。女王がいかにして妻殺しの嫌疑をかけられた男と結婚できようか。

事件直後の数週間、緊張がストレスとなり、女王の神経を狂わせた。しかし、検視結果が発表された後、顔はまだ青ざめ疲れているように見えるものの、女王は、ロバートは無罪なのだから、彼にたいする態度を変えるつもりはないと宣言した。この国家的危機から漁夫の利を得たのはロバートだった。ロバートは枢密院委員に任命され、二年後に、レスター伯爵に叙され、高位貴族の仲間入りをする。

女王はロバートとの結婚をあきらめた。しかし、ロバートを側におかずに生きてゆくことはできない。ふたりのあいだには、すでに君臣の関係を越えた感情が流れるようになっていた。

この事件を機に、レスター伯爵とノーフォーク公爵の軋轢は強まった。そして起こったのが、テニス・コートでの事件なのである。

## 重い病に倒れた女王

白いハンカチを手にする臣下たちの肖像画の制作年代が一五六〇年代に集中しているのに注目したい。女王が重い病に倒れ、瀕死の状況から回復した出来事と関係があるようなのだ。

一五六二年十月十日、エリザベスはいきなり高熱に襲われ、床に伏せた。顔に吹き出物があらわれたかとおもうと、はなはだしい発疹におおわれ、天然痘と診断された。発疹の密度は濃く、顔面が腫れあがった。七日後、話すこともできなくなり、ついに意識を失った。医者は匙を投げた。女王の従兄のハンズドン男爵ヘンリー・ケアリーがドイツ人の医師バーコック博士を呼び寄せ、女王を博士の手に委ねた。博士は暖炉のまえに木製の簡易ベッドを置くように命じ、それから意識を失った女王を真っ赤なフランネルの毛布にくるみベッドに

横たえた。しばらくすると、女王の額から玉のような汗が吹き出した。吹き出す汗を拭くという手当がくりかえされた後、女王はおぼろげながら意識を回復した。医師が小さなスプーンで水を女王の口元にあてると、女王は口をあけ、水を吸いこんだ。女王は危機を脱した。十月二十三日頃までには、公務に復帰できるまでに回復した。それからは疱瘡の痕は薄皮をはぐように薄らいでゆき、化粧をほどこせば、痕はほとんどわからなくなった。

死線をさまよう病から回復した女王の心境に変化が見られた。

スロックモートン卿の肖像画は一五六二年、ノーフォーク公爵の肖像画は一五六三年、ダーンリー卿の肖像画は一五六三年、レスター伯爵の肖像画は一五六四年に制作されている。すべて一五六二年に女王が病から回復した後に制作されている。レスター伯爵とノーフォーク公爵は同じポーズをとっている。ふたりともポシェットから白いハンカチを取り出し、それに右手を添えている。レスター伯爵の右手の背後には、ガーター勲章で囲まれた伯爵の家紋が、左手の後には、セント・マイケル勲章で囲まれた伯爵の家紋が描かれている。右手背後の円柱は神聖ローマ帝国皇帝カール五世のエンブレムのひとつで、のちにエリザベス女王のエンブレムにもなる。レスターは貴族に叙された記念に肖像画を描かせたのであろうが、ポーズとポシェットからはみだす白いハンカチに右手を添えるしぐさはノーフォーク公爵の肖像画とまったく同じである。レスター伯爵がノーフォーク公爵の肖像画を真似ているのは明らかである。この頃、レスター伯爵は女王と結婚する希望をまだ捨ててはいなかったが、重い病から回復した女王の心境の変化を敏感に感じとっていた。

## 白いハンカチは聖母マリアのシンボル

ルネサンス期のフランドル（現在のベルギー西部・フランス北部・オランダ南西部を含み、北海に臨む地方）の絵画「受胎告知」のなかに、錫製のケトルや手洗い盆の横に、リネンのタオルが描きこまれている作品がある（例・祭壇画「受胎告知」の中央、一四二五―一四三〇年、ロベルト・カンピン作、ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵／三翼の祭壇画「犠牲の子羊」の左翼背後の「受胎告知」、一四三二年、ヴァン・エイク作、ゲント、サン・バヴィオン大聖堂蔵）。

「受胎告知」のなかの真っ白なリネンのタオルは、水差しやケトルの水で手を清めたあと、手を拭くための日用品であるが、罪なくして子をみごもり、罪なくして子を出産した聖母マリアの処女性、純潔を象徴している。聖母マリアは罪なくして子をみごもり、罪なくして子を出産した。出産後、聖母マリアは、出まれたばかりの赤子を白いリネンでくるみ、授乳する。さらに、ふっくらとした幼児に成長したイエスを抱き授乳する聖母マリアの膝にしばしば白いリネンが広げられている。（例・「聖母子の肖像を描くルカ」、一四五〇年頃、ロヒール・ヴァン・デル・ウェイデン作、ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵・「聖ヨセフのいる聖家族」一五一三年頃、ヨース・ヴァン・クレーヴ作、ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵）。聖母の処女性と純潔を象徴する白いリネンは、赤子を包む布となり、授乳のときの布になり、十字架にかけられ命を断たれたイエスの遺骸を包む聖骸布となる。白い布で覆われたマリアの膝は、白い布で覆われた祭壇にほかならず、ここには、ミサの聖体拝領が暗示されているという。[8]

## 篩を持つ女王

エリザベス女王の側近たちが誇らしげに見せびらかす白いハンカチはエリザベス女王のエンブレムのようだ。詩人たちが処女王を賛美する恋愛詩を書いて女王に捧げたように、画家が聖母マリアのシンボルを女王の肖像画に描きこみ女王への崇敬の念を表したように、女王の臣下たちは白いハンカチを持つ自分の肖像画を描かせて処女王を賛美し、女王への忠誠を誓っているのであろう。エリザベスは年齢を経るごとに、結婚から遠ざかるほどに、真珠やサファイヤや不死鳥やペリカンや太陽といった聖母マリアのシンボルを自分の肖像画にちりばめ、ヴァージン・クイーン、処女王としてのイメージを強めてゆく。女王の肖像画のなかで、女王に添えられたモノ、女王が手するモノは女王のシンボルである。

ノーフォーク公爵は女王の処女性を賛美する白いハンカチを手にして肖像画を描かせたのであろうが、レスター伯爵はライバル意識を露わにして、同じく、ポシェットに女王の純潔を象徴する白いハンカチを入れ、それにそっと手を添え、処女王を賛美する姿勢を示した肖像画を描かせ反撃している。この肖像画のなかで、レスター伯爵は、ノーフォーク公爵に、女王は処女王として生きるおつもりだ、自分はそのような女王を賛美すると、メッセージを送っているのである。（重い病から回復した女王は、独身を貫く決意をしたようだ。レスター伯爵はそれを敏感に感じ取っていた。）レスター伯爵のメッセージがノーフォーク公爵に届いたかどうかは分からない。公爵は自分の肖像画を真似て、レスター伯爵が肖像画を描かせたと憤慨したにちがいない。

処女性を象徴する白いハンカチを手にするエリザベス女王の肖像画は存在しないが、一五六五年の事件から、女王は常日頃ハンカチを手にしていたと思われる。白いハンカチの代わりに処女性のシンボルである篩を手に

する女王の肖像画が数点現存する。「篩を手にする女王」[9]のなかで、女王が手にする篩は処女のシンボル。篩は、イタリアの詩人ペトラルカ（一三〇四―一三七四年）の「貞節の勝利」の挿話にもとづき、処女性を象徴する。ローマの伝説の乙女トゥチアは、ウェスタ女神の聖なる火を守る六人の乙女のひとり。トゥチアの処女性が疑われたとき、トゥチアはティベレ川に行き、篩で水をすくい、篩のなかの水を一滴もこぼさずウェスタ神殿に運び、純潔を証明してみせた。トゥチアのように、女王は水「漏れ」を制御し、性的な惑溺や結婚への願望を抑制する奇跡的な能力を持ち、国民と国家を掌中にしている。

プロテスタントの信仰を国教としたイギリスから聖母像は姿を消したが、エリザベス女王は聖母の象徴を肖像画に描き込ませ、聖母像の喪失で空虚になった人民の心のなかに、聖母マリアの成り代わりとして入りこみ、かつて聖母が信者に熱愛されたように、国民の敬愛を集めようとした。女王は聖母マリアのように、国民の母として敬愛されることをのぞみ、意図的に聖母マリアのシンボルを装飾品として身につけたり、肖像画のなかに取り入れたりした。聖母マリアのシンボルはエリザベス女王のなかで生き続けており、貴族たちのみならず、民衆もまた、白いハンカチが処女王エリザベスを象徴していることを知っていたのだ。このイメージ作戦は成功し、処女王の伝説が広く喧伝され、統治のための最高の策となった。

## 処女王エリザベス

ハンカチはネッカチーフ（kercher）が小さくなったもの。ナプキン、フォーク、個人用の皿、酒杯など、食事作法が洗練されるプロセスで考え出され、スティタス・シンボルのひとつとなった。[10]『オックスフォード

大英辞典』によれば、ハンカチは一五三〇年頃にはじめてイギリスおめみえし、エリザベス女王の時代に大流行した。

ハンカチは結婚や婚約に際して、しばしば男性から女性に贈られた。それを証拠だてる事件がある。

一五九六年十月十二日、エリザベス・ウィリアムズという名の女性が、カンタベリーの教会法廷に、ウィリアム・ダイヴァースという男性との婚約を解消したいと訴えでた。そのとき、エリザベスは法廷にウィリアムから贈られた品物の一覧表を提出したが、そのなかにハンカチが含まれている。手袋を幾つか（一つは小さすぎたので、ウィリアムの妹にあげた）、バック二個、ガードル、ナイフ二個、ろうそくたて、ペティコート用の布、銀の指ぬき、スカーフ一枚、銀一枚、ペン先を一ダース半、ハンカチ八枚。ウィリアムはエリザベスの母親にも贈り物をしている。手袋二組、暖炉用の薪を二束半、スリッパ一足、蠟燭十二本、鍋二個、葡萄酒用カラフェ一個、サテンとシルクのレース、糊づけのためのスターチ三ポンドなどが記載されている。[11]

エリザベス女王時代のハンカチは入念に織り上げられた生地に繊細な刺繍がほどこされ、ときには真珠などの宝石が縫い込まれた高級品である。ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館には、一六〇〇年頃の、縁が絹糸で刺繍され、その縁がさらに銀糸のボビン・レースで縁どりされた白いリネンのハンカチが所蔵されている。[12] 一五六五年のテニス・コート事件のときに、女王が手にしていたのは、このような、衣装に劣らず豪華な白いハンカチだったにちがいない。

レスター伯爵は大汗をかき、こともあろうに、女王のハンカチで汗を拭った。それを見たノーフォーク公爵は激怒し、レスター伯爵をあまりにも無礼な（too saucy）、といってなじる。“too saucy”には、身分をわき

まえぬ「無礼な」という意味のほかに、ルネサンス時代には「大汗かき」“too sweaty”という意味がふくまれていた。

ハンカチには処女性や清らかさと反対の意味も含まれていた。ハンカチは身体から出る汗、鼻汁、血液などをぬぐう機能を持つ。女性は男性より「湿っぽく」(watery)、液体（分泌物）を「漏らし」、恥ずべき液体を身体から出す。「女性の身体は液体が漏れやすく」、したがって女性は信頼できないとする社会通念がまかりとおり、女性はさまざまな恥ずべき液体を身体から漏らし、女性はそれを制御できない、そのために一族の家系や地位や名誉を傷つける危険な存在になりかねないと考えられていた。[13] ノーフォーク公爵はこう言いたかったのだ。レスター伯爵は異常なほどに汗をかいて体液を放出し、無礼きわまりなく、女のような男ではないか。女のような男は女王の相手としてふさわしくない、不作法きわまりなく下品、女みたいな男だとノーフォーク公爵はほのめかしているのである。

ルネサンスの歴史的な絵画、劇場の小道具、肖像画において、ハンカチはもっぱら女性の属性。ハンカチは衣服と切り離された小物で移動性を持つ。女王のハンカチは処女王のイメージを高揚する品、女王の清らかさのシンボル、だから、汚してはならない。純潔のしるしである女王のハンカチで汗を拭いたレスター伯爵は女王を汚したも同然、犯罪的な行為だ。聖母マリアを汚すにも等しい行為である。カトリック寄りのノーフォーク公爵は、女王のハンカチで汗をぬぐったレスター伯爵を赦せない。テニスを観戦していた人たちは、ノーフォーク公爵の激怒の意味を理解した。

白いハンカチは処女王の、ひいては処女マリア、聖母マリアのシンボルである。とすると、『オセロ』にお

けるハンカチの持つ意味は深い。デスデモーナのハンカチは彼女の手を離れると、人の手から手に渡り、デズデモーナの貞節を訴えながら、ハンカチを手にした人たちを悲劇の奈落にひきずりこんでゆくのである。

## 異文化への興味

シェイクスピアが生きた時代のイギリスでは、イタリアで発祥したルネサンスが遅ればせながら花開き、商業演劇の勃興と隆盛を招き、大航海の成功が異文化と外国人への興味を大きくかきたてた。

航海者ジョン・ホーキンズは、スペインに独占されていた新世界の植民地との奴隷貿易にのりだし、スペインの監視の目をくぐって、一五六二年、西アフリカのギニアに航海し、三百人の黒人奴隷を手に入れ、西インド諸島のスペインの植民地で売り、莫大な利益を手にし、投資家のひとりエリザベス女王に莫大な富をもたらした。

一五六八年、フランシス・ドレイク（一五四七頃―一五九六年）は親戚のホーキンズに随行して初航海し、さらに、単独で、一五七七年から一五八〇年にかけて、世界周航に成功する。フランシス・ドレイクの世界一周航路の成功は大航海時代の幕開けとなった。新しい国々が次々に発見され、イギリス人の興味は外の世界に向けられた。どこにどのような人間が住み、どのような生活をし、どのような文化を持っているのか。ドレイクの航海に随行した牧師の日記が出版されたのをかわきりに、地理や地誌学や外国の習慣や風習を綴った書物が続々と出版された。エリザベス女王の寵臣のひとり、ウォルター・ローリーは、一五八五年から一五八六年の北アメリカのヴァージニアへの航海のとき、牧師ジョン・ホワイトを伴い、彼の地で目にした興味深いもの

を写生させ、一五九〇年に出版した。[14] 航海者の日記を集大成したオックスフォード大学のリチャード・ハキュリット編、八冊から成る『航海と発見』[15]が出版されたのは一五八九年。アラビア語とイタリア語で書かれたレオ・アフリカーヌス著『アフリカの地理史』の英訳版が出版されたのは一六〇〇年だった。[16] レオ・アフリカーヌスはムーア人、ムーア人を主人公にした『オセロ』は、イギリス人の異文化への興味が高揚するただなかで創作され、上演された。レオ・アフリカーヌス著『アフリカの地理史』はシェイクスピアが読んだと思われる地誌書のひとつである。このなかで、あるアフリカ部族の結婚にまつわる風習が紹介されている。

**新婚初夜の血染めのハンカチ―アフリカ部族の結婚の風習**

レオ・アフリカーヌスが紹介するあるアフリカ部族の「結婚の儀式」を知ると、デスデモーナのハンカチが持つ深い意味を理解できるであろう。

花嫁の父が娘を花婿に引き渡すやいなや、花嫁と花婿を伴い、友人や縁者たちといっしょに教会（寺院）に行くが、このとき、みなのまえで結婚契約と持参金を記録するために、司法書士を伴う。通常の持参金は三十ドゥカート、奴隷の女の持参金は十五ドゥカート、ほかに彩り豊かで刺繍がほどこされた衣服、帽子やヴェイルの代わりに、同様に彩りのあるスカーフや布、靴一足などが父から娘に贈られる。……儀式が済んだら、婚礼客は宴会に招かれる。蜂蜜で味つけされた揚げパンのような豪華なお菓子や、ローストミートが食卓に並べられる。宴会の費用は花婿持ち。この宴会が終わると、花嫁の父が主催する宴会が

始まる。花嫁の父が花嫁に持参金の他に、幾着かの衣服をあたえれば、気前のよい父親であるとみなに思われる。父は三十ドゥカートを持参金として娘にあたえるが、ほかに二百、いや三百ドゥカートはする衣服や飾り物などをあたえる場合もある。しかし、家やぶどう園や田畑を娘にやる父はめったにいない。……花婿は花嫁を、担ぎ手がかつぐ輿にのせ、実家に向かう。花嫁の両親、親類縁者が後に続き、トランペットや笛の音や太鼓や、ときにはたくさんの松明に先導される。松明を手に行列を先導するのは、花婿の親類縁者、その後を花嫁の親類縁者が続く。大きな市場に到着し、寺院を過ぎたところで、花婿は花嫁の父や縁者に別れを告げる。そこから出来るだけ早く実家をめざす。……花婿の父、兄弟、おじたちが花嫁を花婿の部屋の戸口に導き、そこで、花嫁を花婿の母にゆだねる。花嫁が部屋に入るやいなや、花婿は足を花嫁の足に触れ、ふたりだけになる。その間、広間で宴会が行われる。新婚の部屋の戸口に、ひとりの女性が立っており、夫婦の契りが済むのを待っている。夫婦の契りが済むと、花婿は血のついたナプキンをその女性に渡す。その女性は血痕のついたナプキンを手にして宴会場に行き、婚礼客たちに、ナプキンを見せながら、大声で、花嫁は今日にいたるまで汚されたことがなく処女であったと宣言する。……しかし、花嫁が処女でなかった場合、結婚は取り消され、花嫁は不名誉にも実家に送り返される。(17)

このなかで言及されている血痕のついたナプキンは無論、花嫁の純潔の証拠である。このような慣習は古くからの伝統で、ナプキンの代わりに、血痕のついた白いシーツを花嫁の純潔のあかしとする風習の国や地方もある。ロバート・バートンは『憂鬱の解剖』（一六二一年）の「嫉妬の兆候」という項目のなかで、血のつい

た初夜のシーツ」や「初夜の血がついたナプキン」[18]といった目に見える証拠を示して、花嫁の処女性の証拠とする風習の国々を記述している。こういった風習はギリシア人、ユダヤ人、アフリカ人などのあいだに多く見られ、イギリス人以外の人種、プロテスタント以外の宗教を信じる人たちに多く見られる風習であると述べている。

## 処女のしるし

バートンによると、血痕のついたハンカチやシーツを花嫁の処女のしるしとする風習はイギリスには見られないということだが、シェイクスピアが生まれるまえのヘンリー八世（一四九一―一五四七年）の時代に、イギリスのみならず全ヨーロッパのキリスト教国を揺るがせた次ぎのような事件があった。

一五二九年、ヘンリー八世は王妃キャサリン・オブ・アラゴンと離別し、王妃の侍女アン・ブーリンとの結婚を望み、ロンドンのブラック・フライヤーズ修道院で法廷裁判を開催した。キャサリンとの離別を正当化するヘンリー八世の錦の御旗は旧約聖書『レビ記』の記述「人がもし、自分の兄弟の妻をめとるなら、それはいまわしいことだ。彼は兄弟をはずかしめた。彼は子のない者となる」（二十・二十一）だった。

王妃キャサリンはヘンリー八世の兄アーサー王子の花嫁としてイギリスにやってきたが、結婚後、わずか四か月余りで、アーサー王子と死別する。キャサリンはスペインへ帰ることを許されず、アーサー王子の弟ヘンリーと婚約させられた。一五〇九年にヘンリー七世が亡くなるやいなや、ヘンリー八世として即位したヘンリー王子はキャサリンと華燭の典をあげた。ヘンリーは十八歳、キャサリンは二十四歳だった。アーサー王子と

キャサリンは幼く、夫婦の契りを結んでいなかったとして先の結婚は無効とされ、ローマ教皇から許可を得てヘンリーとキャサリンの結婚が実現した。

それから二十年後、過去の出来事が蒸し返される。ヘンリー八世は、キャサリンは兄アーサーと夫婦の契りを結んでおり、従って、ふたりはれっきとした夫婦であった、兄アーサーが亡くなり、自分はキャサリンと結婚したが、自分と結婚したときのキャサリンは処女ではなかった、それゆえ、キャサリンとの結婚は『レビ記』の教えに背く忌まわしいもので、それが証拠に、男の子がひとりも授からず、授かったのはメアリー王女ただひとりであると、離婚の正当性を述べ立てたのである。

キャサリン王妃の支持者たちは、ヘンリーと結婚したときのキャサリンが処女であったことの証拠を得ようと奔走した。アーサー王子とキャサリン、ヘンリーとキャサリンの初夜にたちあった人たちが証人として法廷に召還された。

ヘンリー八世のほうは、片腕のトマス・ウルジー枢機卿が前面に躍り出て、キャサリンとアーサー王子の夫婦の契りは結ばれたと主張した。ウルジー枢機卿はこう証言したのである。アーサー王子とキャサリンの結婚のとき、キャサリンの両親、アラゴン王フェルナンドとカスティリア女王イザベルの特使たちは、結婚式を終えたアーサー王子とキャサリン王女が夫婦の契りを結んだことを確認し、その証拠として、花婿と花嫁の新床の血痕のついたシーツを手に帰国の途についたという。そうだとすると、血染めのシーツを花嫁の処女の証拠とする風習はイギリスにもスペインにもあったということになる。旧約聖書『申命記』には次ぎのように記されており、多くのキリスト教国で、血痕のついたシーツやナプキンや衣服が処女のあかしとされていたと考え

られる。

もし、人が妻をめとり、彼女のところにはいり、彼女のことを嫌い、口実を構え、悪口を言いふらし、「私はこの女をめとって、近づいたが、処女のしるしを見なかった。」と言う場合、その女の父と母は、その女の処女のしるしを取り、門のところにいる町の長老たちのもとにそれを持って行きなさい。その女の父は長老たちに、「私は娘をこの人に妻として与えましたが、この人は娘をきらいました。ご覧ください。彼は口実を構えて、『あなたの娘に処女のしるしを見なかった。』と言いました。しかし、これが私の娘の処女のしるしです。」と言い、町の長老たちの前にその着物[19]をひろげなさい。（二十二・十三ー十七）。

花嫁が処女でないと分かったときには、どうなるのか。同じ『申命記』にはこう記されている。

しかし、もしこのことが真実であり、その女の処女のしるしが見つからない場合は、その女を父の家の入口のところに連れ出し、その女の町の人々は石で彼女を打たなければならない。彼女は死ななければならない。その女の父の家で淫行をして、イスラエルの中で恥辱になる事をしたからである。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。（二十二・二十ー二十一）

エリザベス女王のイギリスでも、花嫁の処女性がことのほか重んじられ、花嫁が処女でないことが判明した

場合、婚約を破棄できたことが、シェイクスピアの作品からも分かる。『嵐』のなかで、娘ミランダとの結婚をナポリ王子ファーディナンドに許したプロスペロがファーディナンドに、こう言っている。

では、わたしの贈り物として、またそなた自身がその手で
りっぱに勝ちえたものとして、娘を受けとるがいい。
だがもしも、聖なる婚礼の式がとどこおりなく
とりおこなわれる前に、そなたがこの乙女の帯を
解くようなことがあれば、天はふたりの結婚を
実り豊かにする恵みの露を注ぎたまわず、
それどころか、不毛の憎しみ、軽蔑のまなざし、
たえざる不和が新床に花ならぬ忌まわしい雑草を撒き、
ふたりともそれに身を横たえることになるだろう。（四幕一場）

『から騒ぎ』のなかで、クローディオは彼に恨みを持つドン・ジョンの奸計にはまり、許嫁のヒーローが身持ちの悪い女だと信じこみ、結婚式の当日、「お嬢さんをお返しします。二度とこの腐れみかんをご友人におまわしにならぬよう……ヒーローが顔を赤らめたのは、つつましさではなく罪のあかしです」（四幕一場）といって、結婚の破棄を宣言する。クローディオは「この女はすでに淫らな床の熱っぽい味を知っております」

とヒーローを罵倒する。ヒーローは気を失ってその場にくずれ落ちる。

チューダー朝は、処女性ということに偏狭なまでにこだわった時代である。ヘンリー八世は六人の王妃と結婚し、ふたりを離別し、ふたりを処刑台に送り、ひとりを病没させた専政君主として悪名高いが、ヘンリーの三番目の妃キャサリン・ハワードは昔の恋人と逢い引きしたとの理由で、アン・ブーリン妃と同様に断頭台に送られた。キャサリン・ハワードを処刑する直前に、ヘンリーは「私権喪失法」を成立させた。キャサリン・ハワードを「王の宝石」とよび、溺愛したにもかかわらず、不貞をはたらかれて酷く傷つけられたヘンリーは、国王の妻あるいは愛人となった女性の不行跡を知っていて報告をしなかった場合、その臣下を大逆罪に問うことにしたのだ。臣下が君主のご機嫌を取ろうと、若い女性を献上し、その女性が処女でないと分かったときには、「私権喪失法」にしたがい、大逆罪に問われ、すべての財産を剝奪されることになった。これまでは、一族から妃が出れば、親類縁者のみならず友人たちまでも異例の出世を果たし、高位の爵位を叙され、大金持ちになることができたが、「私権喪失法」が成立してからは、お妃候補の名をあげたり、自分の娘を妃として押し出す貴族は皆無になった。一歩まちがえば、出世どころか、ロンドン搭と斧が待ち受けているのだ。親だとて、娘がこよなく清らかで、一点のしみもないことをいかに証明できようか。「私権喪失法」などという法律がなくとも、二人の王妃を処刑した君主に娘を差し出す貴族はいなかった。キャサリン・ハワードを処刑したあと、ヘンリーは自分で妃探しをしなければならなかった。処女性にこだわったヘンリーが六番目にむかえた妃キャサリン・パーは、皮肉にも、二回の結婚歴がある女性だった。

## 苺が刺繍されたハンカチ

デスデモーナのハンカチは「空気のように軽いもの」（三幕三場三二三行）、「魔法が織り込まれたもの」（三幕四場六五行）、「あばずれからの記念品」（四幕一場百四七行）、「愛の記念と誓いの品」（五幕二場二百十三行）、「古い記念の品」（五幕二場二百十五行）などと呼ばれ、三十四行いじょうにわたって言及されている。新婚の寝台を覆ったシーツは二十五回言及されている。イヤゴーの下品なことばによって、オセロとデズデモーナの新床とシーツのイメージがオセロの頭のなかに執拗にこびりつき、オセロは淫らな妄想にかられ、ついに「情欲に汚れたベッドを情欲の血で染めてやる、そう固く決心した」（五幕一場）と言いながら殺人へ突っ走る。デズデモーナのハンカチは「空気のように軽いもの」どころか、時間を経るにつれ、デズデモーナの生き死にがかけられた重要な小道具に変貌してゆく。

「ムーア様がデズデモーナ様に初めて贈った品」（三幕三場）のハンカチに苺が刺繍されていることを口にするのは、イヤゴーである。イヤゴーはデズデモーナとキャシオーが親密な関係にあることをほのめかしたあとで、オセロにこうたずねる。

イヤゴー　ただひとつうかがいたいのは、
奥様が苺の刺繍のあるハンカチを
お使いになっているのを、ごらんになったことはありませんか。
オセロ　それならおれがやったものだ。（三幕三場）

シェイクスピアが種本にしたイタリアのジラルディ・チンティオの『百話集』（一五八五年）の第三巻第七話にある小品では、ムーア人が妻に贈るハンカチには「ムーア風」の装飾が施されていると記されているだけである。それを、シェイクスピアは意図的に苺の装飾に変えている。この変化は劇の意味を決定的に変える。

『イメージ・シンボル事典』[20]によると、苺（薔薇科に属する）は、薔薇と同様に、愛の神と聖母マリアのエンブレムである。三枚の葉に白い花をつけ、熟すと赤くなる苺の実は聖母マリアのシンボルにふさわしい。白は純潔の、赤は神の愛の色だからである。苺は熟していないときは冷えて乾いているが、熟したときには汁が多くみずみずしい。キリスト教の解釈では、苺は正義のシンボル、聖母マリアはしばしば、苺が刺繍された衣服をまとって描かれた。[21]

オセロが「愛と記念の誓い」としてデズデモーナに贈ったハンカチは、デズデモーナの手を離れるやいなや、デズデモーナの不貞のあかしとしてイヤゴーに利用され、オセロはデズデモーナ殺害に突っ走る。ハンカチは不可思議な意味あいと魔法の力を強めながら、まるでブラックホールのように、ハンカチに関わった人たちを飲み込んでゆく。その一方で、赤い苺の刺繍のあるハンカチは、血痕のついたナプキンと同様に、デズデモーナの貞節を訴えつづける。ハンカチは、最後に、オセロの血で染まったベッドのシーツへと変貌し、デズデモーナの貞節の動かぬ証拠となる。当時の観客は、苺の刺繍のある白いハンカチと血染めのシーツの類比をけっして見逃さなかったであろう。

## ハンカチを落としたのはだれか

三幕三場、デスデモーナは、オセロの様子がいつもとは違うことに気づく。

デスデモーナ　まあ、元気のないお声。
　おかげんでも悪いのですか。
オセロ　この額がやけるように痛むのだ。

シェイクスピア時代の観客は、妻を寝とられた夫の額には角がはえ、頭痛に苦しむと信じていた。しかし、オセロが額が痛むといっても、デスデモーナは暗示に気づかず、夫は頭が痛いのだろうと思い、夫の額を自分のハンカチでしばろうとする。

「ゆうべよくお休みにならなかったせでしょう。大丈夫、きつくしばってあげましょう。一時間もしないうちによくなりますわ」といいながら、ハンカチを取り出し、夫の額にあてようとする。オセロはデスデモーナの手をふりはらう。「おまえのハンカチでは小さすぎる。」

デスデモーナの手からハンカチがはらりと落ちる。デスデモーナの慰めを拒絶したオセロはいう、「ほうっておけそんなもの、さあいっしょに行こう。」

このときまでのオセロにとって、デズデモーナのハンカチは落としても惜しくない「そんなもの」なのである。妻の手からハンカチが落ちるのを目にし、拾う必要はない、ほうっておけと言ったのはオセロだ。

## エミリアの思惑

イヤゴーの妻エミリアはオセロとデスデモーナのやりとりの一部始終を見ていた。ふたりが退場すると、エミリアはただひとりが舞台に残される。デスデモーナの手から落ちたハンカチが床に横たわっている。エミリアはハンカチを拾いあげる。

まあ、よかった、これが手に入って。
このハンカチは奥様がムーアさまからいただいた最初の記念の品、
うちの気まぐれ亭主が幾度となく
盗んでくれといってたけど、奥様はとても大事にされている。
旦那様は、いつも肌身離さず、
もっているようお命じになった。
奥様はこれにキスしたり、話しかけたりされておられる。
そうだ、この模様を写しとってから
イヤゴーにやることにしよう。あの人がどうするかは、
神様だけがご存じ、わたしの知ったことではないわ。
わたしはただ、あの人の気まぐれを満足させてやるだけ。（三幕三場）

エミリアは、ハンカチがオセロからデスデモーナへの最初の贈り物であり、デスデモーナがそれを大事にしているのを知っている。そのエミリアが、拾ったハンカチを、なぜ「気まぐれ亭主」に渡そうとしたのか。なぜ、ハンカチを夫に渡す自分の行為を正当化しようとしているのか。ハンカチを盗めとしつこく命じる夫が、盗んだ品を悪用することは目にみえている。しかし、エミリアは知らないふりをする。「あの人がどうするかは、神様だけがご存じ、わたしの知ったことではないわ。わたしはただ、あの人の気まぐれを満足させてやるだけ。」

のちに（三幕四場）、デスデモーナが「あのハンカチをどこでなくしたのかしらね、エミリア？」ときくと、エミリアは「わたしは存じませんが」と、とぼける。デスデモーナにたいするエミリアの誠実さは疑いないだけに、エミリアの態度は不可解だ。ただひとつ確実なことは、エミリアとイヤゴーの夫婦関係がうまくいっておらず、夫の欲しがっているハンカチをたまたま手にいれたエミリアが、夫との関係修復にハンカチを利用しようとしていることである。

エミリアはハンカチを夫に渡すまえに、写しをとろうと考える。エミリアはハンカチの写しをどうするつもりだったのか。のちに、ハンカチを宿舎で見つけたキャシオーがビアンカにその写しをとってくれと頼んでいることからも、模様は傍目にも珍しく魅力的だったのだろう。エミリアが苺の刺繍に惹かれていたとしても不思議ではない。エミリアは写しをイヤゴーにやり、本物を自分のためにとっておくか、見つけたと言ってデスデモーナに返すつもりだったのか。いずれにしても、エミリアにはハンカチの写しをとる時間はあたえられて

いない。イヤゴーがあらわれ、ハンカチをエミリアの手からひったくるからだ。イヤゴーはハンカチがムーアからデスデモーナへの贈り物であり、それをデズデモーナが大事にしていたのを知っているからこそ、手に入れたかったのだ。

デスデモーナは、額が痛むと言って妻を邪険に扱う夫の冷たい態度に狼狽し、ハンカチを落としたことに気づかない。デスデモーナの手をふりはらったときにハンカチが落ちたことに気づいたのはオセロで、落ちたハンカチを拾わずにそのまま捨てておけと命じたのもオセロである。ハンカチを失う原因をつくったのはオセロで、オセロは、デスデモーナの手からハンカチが落ちたのを知っている。この時点まで、デスデモーナのハンカチには、特別な意味はこめられていない。しかし、ハンカチがデスデモーナの手を離れ、イヤゴーの手に落ちるやいなや、ハンカチをオセロに見せることができないデスデモーナを苦しめる。

## イヤゴーの手に落ちるハンカチ

エミリアが床からハンカチを拾いあげるやいなや、イヤゴーが姿をあらわす。エミリアは、デスデモーナが大切にしており、夫が幾度となく盗めと頼んだ品を、夫との駆け引きに使おうとする。ハンカチがそれにあたいする品であることを、エミリアは知っている。「あんたにいいものあげようと思っていた。例のハンカチをあげたら、お礼になにをくれる。」イヤゴーはきく。「どのハンカチだ。」「どのハンカチですって？　ほら、ムーア様がデスデモーナ様にはじめて贈った品よ、盗んでくれってしょっちゅういってたじゃないの。」イヤゴーはたずねる。「盗んだのか、おまえ?」エミリアは答える。「いいえ、奥様がうっかり落としたの。たまたま

いあわせたわたしが拾っただけ。」

イヤゴーはエミリアからハンカチをもぎとる。「よくやった。おれによこせ。」

ハンカチがエミリアの手を離れた瞬間、エミリアは、とんでもないことをしでかしたことに気づき、ハンカチを返してくれと夫にせがむ。「たいした目的もないのなら、返してよ。かわいそうに、なくしたとわかったら奥様は気が狂うかもしれないわ。」

イヤゴー　おれには使い道があるのだ。

さあ、あっちに行ってくれ。

ハンカチはエミリアの手には戻らない。エミリアが姿を消すと、イヤゴーはハンカチの使い道について独白する。

このハンカチをキャシオーの宿舎に落としておけば、

あいつが見つけるだろう。空気のように軽いものでも、

嫉妬に狂う男には、聖書と同じ重みのある

証拠の品となる。（三幕三場）

とはいえ、イヤゴーにも、「空気のように軽いもの」がいかなる力を発揮するかは分からない。しかし、ハンカチが嫉妬に苦しむオセロを狂気に向かわせる力をもっていることは分かっている。だが、この時点で、ハンカチはまだ「こんなもの」にすぎない。

そこへ、オセロが暗い顔つきで入ってくる。イヤゴーが注いだ毒が全身にまわり、デスデモーナがキャシオーと不義をはたらいているのではないかという邪推は血のなかで嫉妬の炎となって燃えあがり、まるで硫黄のようにオセロを焼きつくそうとしている。オセロは人が変わったようだ。オセロが邪推にのたうつさまをじっくり観察したあと、イヤゴーはオセロにさりげなくきく。

イヤゴー　ただひとつうかがいたいのは、
奥様が苺の刺繍のあるハンカチを
お使いになっているのを、ごらんになったことはありませんか。
オセロ　それならおれがやったものだ。
イヤゴー　それは知りませんでした。実はそのハンカチで――
たしかに奥様のだと思いますが――キャシオーが今日
髭をふいているのを見かけたのです。

オセロはイヤゴーのことばに衝撃を受ける。髭は男性のシンボル。イヤゴーのことばには、エロティックな

意味がこめられており、オセロに一撃をあたえる。「ああ、あの下郎め、何千ものいのちがあればいい！　一つではたりぬ、一つではこの恨みは晴れぬ。……どす黒い復讐、うつろな洞窟から起き出してこい！　あけわたせ、おお、愛よ、その王冠と王座を暴虐な憎しみに譲りわたせ！　その毒で、胸よ、腫れるがいい、毒蛇の牙に嚙まれたように！」

たかだかハンカチがこれほどの威力を発揮しようとは！　ハンカチの効果にイヤゴー自身驚く。オセロの狼狽ぶりはイヤゴーの予想をはるかに超えていた。

**母の世界と魔法**

デズデモーナはオセロにキャシオーの復職を頼んでいた。デズデモーナがキャシオーのところに道化を使いにやり、自分のところに来るようにと言付け、キャシオーを待っていると、オセロが姿を見せる。オセロは「はなが出てしょうがない。ハンカチを貸してくれ」と言う。デスデモーナはオセロから贈られたハンカチを出すことができない。デスデモーナが「いまは手元にないのです」と答えると、オセロは思いもかけぬ話をはじめる。

オセロ　あのハンカチはな、

あるエジプト女がおれの母にくれたものだ。

その女は魔法使いで、人の心を読むことができた。

その女が母にいったそうだ、このハンカチをしっかり
身につけていれば、夫にかわいがられ、その愛を
ひとり占めにできるだろう、が、もしなくしたり、
人にやったりすれば、たちまち夫の目には
嫌悪の色が浮かび、その心は新しい浮気を求めて
離れていくだろうと。母は死ぬときあれをおれにくれて、
さいわい妻をめとる日がきたら、その人にあげなさい、
といった。おれはそのとおりにした。だからいいな、
あれを自分の目のように大事にするのだ。
なくしたり、人にやったりすれば、とり返しのつかぬ
身の破滅となるぞ。
デスデモーナ　そのようなことがほんとうに？
オセロ　ほんとうなのだ、あれには魔法が織りこんである。
二百年もこの世にあって太陽の運行を
見つめてきた巫女が、神がかりの状態で
あの模様を縫いあげたのみならず、
神のまえで清められた蚕が糸を吐き、その糸をもちい、

秘法をもって、乙女のミイラの心臓からしぼりとった
薬液につけて染めあげたものだ。
デスデモーナ　まさか、そのような。（三幕四場）

赤染料に使ったのが乙女のミイラの心臓で、苺の模様はその染料で染められた赤糸で刺繍された。ここでのハンカチは処女性を強く象徴している。

オセロの物語には、人間を催眠にかける不思議な威力がある。エミリアは「旦那様は、いつも肌身離さず、もっているようお命じになった」（he conjured her she should ever keep it）といっている。「お命じになった」の原文 conjure には、命じるという意味のほかに、魔術師が魔物を呼びだす、呪術を使うという意味がある。

デスデモーナの父ブラバンショーは、ムーアが娘を魔法でたぶらかし、結婚を強要したと信じて疑わず、デズデモーナと結婚したオセロをこう言ってなじった。

ええい、汚らわしい盗人め、娘をどこに隠した？
この罰あたりが、娘を魔法にかけてたぶらかしたな。
ものの道理をわきまえるすべてのものに訴えよう、
こいつの魔法の鎖に縛られたのでなければ、

あれほど優しく、美しく、しあわせな娘が、
そして結婚をきらい、この国の裕福な美青年をも
婿にはしようとはしなかった娘が、どうして
世間の物笑いになるのを承知で、親の膝もとをのがれ
きさまのような男の黒い胸に飛びこんだりするか！（一幕二場）

オセロに関して、魔術に関わるconjureということばを使うエミリアも、ブラバンショーと同様に、オセロがデスデモーナに魔法をかけ、わがものにしたと考えているようだ。オセロは、処女という砦に閉じこもるデスデモーナのこころを開かせた。その力を、ブラバンショーもエミリアも魔術としか考えられぬと思っている。

ハンカチの制作者はエジプトの魔女だった。苺の模様の糸を染める原料となったのは乙女の心臓、ハンカチに苺の模様を刺繍したのも、ハンカチを所有していたのも女。このような過去を持つハンカチは母と女の世界のシンボルである。苺は愛の女神のエンブレム。オセローの話を信じれば、苺が刺繍されたハンカチは、オセロの父の愛を母につなぎとめていた。

エミリアの台詞で興味深い点は、デスデモーナがハンカチにキスしたり、話しかけたりしていると語っていることである。母離れのすまない幼児は、おしゃぶりや毛布や、柔らかな布などを肌身離さず、それを片時も離さない。毛布やおしゃぶりに触れていると安心し、幸福な気持ちになる。オセロから贈られたハンカチは夫

の身代わり、オセロがいないときは、ハンカチに接吻したり話しかけたりしているデスデモーナの姿が、エミリアの台詞から浮かんでくる。軍人がたむろするキプロス島は男の世界だ。そんな殺風景な風景のなかで、ハンカチは母の優しさを感じさせる唯一のモノである。デスデモーナはそのハンカチを肌身離さず大事にしていたのだ。

デスデモーナが夫の贈り物を大事にしていることは、彼女が親の支配下から出て結婚し、一人の女性として歩きはじめたことの明かしである。と同時に、ハンカチは子ども時代、母の世界の思い出の品でもある。デスデモーナは結婚して妻となった。やがて母となり、男の世界へとりこまれるであろう。しかし、その世界に隷属することに、まだ抵抗をおぼえていた。ハンカチを失って動揺するデスデモーナは、彼女がまだ自立を果たしていない複雑な心理状態にあることを語っている。

デスデモーナは、ハンカチを無くしたことを知ると、幼児がおしゃぶりを無くしたときのように、パニック状態に陥る。「金貨をいっぱいつめた財布をなくしたほうがどんなによかったことか。…どう思われてもしかたがないわ」（三幕四場）とエミリアに語る。

オセロは、ハンカチは父から母への贈り物だったと語り、あのハンカチを身につけてさえいれば、夫の浮気心を制し、夫の愛を永遠に自分にむけることができると言う。夫婦の強い絆となるべきハンカチ。それをデスデモーナはなくしてしまった。オセロの目には邪推と嫌悪の色が浮かんでいる。夫の心はデスデモーナのもとを離れてゆくだろう。デスデモーナが、自分の主人は嫉妬深くないから安心というと、エミリアは驚き、「嫉妬深くないのですか」ときく。デスデモーナは「きっとあの人の故郷の太陽が、そういうじめじめした気質を

吸いとったのよ」と答える。「あの人の故郷」では、血染めのハンカチが処女性、貞節の証拠となっている。ハンカチを出すことができないデスデモーナを見て、オセローのなかに潜むムーア人の血が騒ぎはじめる。現実のオセロはデスデモーナの思い描く勇猛果敢な武将からはほど遠い。

エジプト女から母が貰った魔法のハンカチというのは、オセロの作り話であろう。オセロが自分の話を信じていようがいまいが、オセロの話はデスデモーナに強い衝撃をあたえる。「魔法が織りこんである」ハンカチを失ったことで恐怖にちかい不安をおぼえる。

夫が姿を消すと、デスデモーナは悲しげにいう。「きっとあのハンカチには不思議な力があるのでしょう。ほんとうに悲しいわ、あれをなくしてしまうなんて。」

エミリアは、ハンカチを見つけてイヤゴーに渡したことを告白する機会を逸する。代わりに、男への呪詛を吐く。「男なんてたちまち正体をあらわすものですよ。だいたい男はみな胃袋で、わたしたちは食べ物です、わたしたちをがつがつむさぼっておいて、満腹したら、あとで吐き出すんですから。」(三幕四場)

自分の意志を貫き、父親の承諾を得ずにムーア人を夫に選んだデスデモーナ。このような行為は、今日ににおいてさえ、エリザベス女王の時代においてはなおのこと、勇気ある大胆不敵な行為である。デスデモーナのまわりには父権をふりまわす父はいても、彼女をやさしく包む母の影がない。旺盛な独立心とみかけの成熟さとはうらはらに、デスデモーナの心の奥底には、不安が隠されている。

ブラバンショーにとりデスデモーナは財産の一部。デズデモーナは父の保護下から脱出し、オセロと結婚した。だからといって自由と自立をえたわけではない。別の男、オセロの保護下に入り、オセロの持ち物になっ

たにすぎない。オセロと結婚して父に勘当されたからには、オセロにすがって生きてゆくほかに道はない。ヴェネツイアから遥か離れたキプロス島にきてからは、デスデモーナの不安は増した。

デスデモーナが自分の亡き母について語るのは、父に結婚の意志を伝えたときだけである。デスデモーナは、父と夫への愛についてコーディリアと同じ考えを表明する。嫁ぐ娘が一様にもつ心情であろう。

お父様、わたくしのつとめは、二つに引き裂かれています。
お父様には、生みの恩と育ての恩を受けております。
生まれ育ったこれまでの月日がお父さまをうやまうよう
教えてくれます。
わたくしは真心から孝養をつくすべきです。
お父さまの娘なのですから。でも、いまはわたくしの夫がおります。
そして、お母様が、ご自分の父親以上に夫であるお父様に
真心からつとめたように、わたくしも夫であるムーア様に、
真心からつくしたいと思います。（一幕三場）

デスデモーナのことば、コーディリアのことばがリア王を打ちのめしたように、ブラバンショーに大きな打撃をあたえる。

オセロが魔術を使って娘をたぶらかしたと訴えるブラバンショーにたいし、ヴェネツイア総督は、理性的に身を処すように助言し、娘を取られた父の身になって格言を披露し、慰めた。

癒しがたいとなれば悲しみはやむものなり…
過ぎ去りし不幸をいつまでも嘆くことは、
新しき不幸をたちまち招くもとなり。…
盗まれた微笑みは盗人より盗むものなり、
無益な悲しみに身をまかすは、みずからを盗むものなり。

（一幕四場）

デスデモーナがヴェネツイアを離れるやいなや、父親は心痛のために亡くなる。娘が吐露した心情を理解してやれば、娘の決意を祝福し、生きながらえたであろう。子離れができない親はおのれのみならず、子をも破滅させる。ブラバンショーの悲劇は、子どもを独立した人格とみなすことができず、所有物のように考える親の陥る悲劇である。

デスデモーナも、ハンカチをめぐるデスデモーナとオセロの諍いを見ているエミリアも、失われたハンカチが、ただのハンカチではないと思いはじめる。床にはらりと落ちたデスデモーナのハンカチ。「そんなもの」で「空気のように軽いもの」のハンカチはいまやのっぴきならない意味を持つものとなる。一枚のハンカチが

デズデモーナやエミリアやオセロの心のなかで、モノ以上の力を持つと思われはじめたとき、ハンカチの魔法が力をふるいはじめる。二百年も生きたエジプトの巫女が、乙女のミイラの心臓で色を染めあげた糸で神がかりの状態のなか、苺の模様を刺繍した。そのときの魔術的な世界が、デスデモーナとエミリアとオセロのまわりに漂いはじめる。ヴェネツイアの理知的で平和な世界とは別の異界が立ち現れる。デスデモーナのまわりにたちこめた魔法の霧の世界は、ヴェネツイア共和国の秩序だった理性的で現実的な世界からいかに遠く隔たっていることだろうか。

## ハンカチを操るのは誰だ

ハンカチをあやつるのは自分であるとイヤゴーは思っている。だが、オセロの想像力のなかに深く食いこんだハンカチは、イヤゴーの力をはるかにうわまわり、まるで命を得た生き物のように、オセロのなかで破壊力をふるう。

エミリアは、ハンカチがイヤゴーの手のなかにあることを知っている。デスデモーナはハンカチのありかを知らない。デスデモーナがハンカチをキャシオーにやったと信じ込まされたオセロは、ハンカチを見せろと妻に強要する。アフリカの部族の貞節な花嫁とは違い、デスデモーナはハンカチを夫に見せることができない。ハンカチを見せることができないのなら、デスデモーナは貞節ではない！　デスデモーナは、すぐにハンカチを出せとのオセロの要求に応えられない。「なくしたわけではありませんが、いまはいやです。」オセロは「あのハンカチをもってこい」といったあと、デスデモーナのことばに一切耳を貸さず、三度くりかえして執拗に

同じことをいう。「ハンカチだ！」、「ハンカチだ！」、「ハンカチだ！」妄想にかられたオセロは、ハンカチ以外のことを考えられない。

「あんなもの」であったハンカチがいまやオセロにとり、デズデモーナの不義の証拠となる。ハンカチを見せることのできないデズデモーナはキャシオーと不貞をはたらいたのにちがいない。ハンカチに操られているオセロに、デスデモーナがはじめて、そしてさいごになる、反論を投げつける。

「あなたがまちがっています。」

オセロは叫ぶ。

「もういうな！」

問答無用！　妻と夫のコミニュケーションが完全に絶たれた。ハンカチにとりつかれたオセロは、短絡的にこう結論した。ハンカチが出せなければ、それはデスデモーナが不義密通をおかしている確かな証拠だと。

それから、オセロは、まるで悪を懲らしめ正義を司る祭司のようにデズデモーナを罰しなければならないと思いつめる。聖書が教えるとおり、悪は除き去らなければならないからである。

苺が刺繍されたハンカチは、オセロの邪推を煽り、オセロをあくことを知らぬ底なしの復讐へとかりたてる。ハンカチが男の嫉妬と殺意をあおる復讐の品へと変化したとき、ハンカチから愛と母の世界のぬくもりが消えうせる。

もはやだれもオセロの復讐の激流をくい止めることはできない。あとは、殺人へとひたはしりに走るだけだ。イヤゴーはデスデモーナのハンカチを妻に盗ませ、ハンカチを武器に、オセロを嫉妬地獄に追い込む。ハン

カチは手から手へと、持ち主を変えながら、まるで生き物のように、それを手にした人の運命を狂わせる。オセロの目には、デズデモーナの不義の動かぬ証拠となって、オセロはデスデモーナを絞め殺する。

赤い苺が刺繍されたデズデモーナの白いハンカチは遠目には、血痕のついたハンカチに見えるだろう。オセロはデズデモーナがハンカチを見せられないことを不貞のあかしと考えるが、アフリカの部族の結婚の風習にまつわる血痕のついたハンカチのように、この苺の刺繍のあるハンカチはデズデモーナの貞節のあかしである。デズデモーナのハンカチはオセロによって振り落とされたときから最後まで、デズデモーナの貞節を観客に訴えている。最後に、オセロはハンカチをめぐる真相を知り、貞節な妻を絞め殺したことを知り、自害しはてる。オセロの血で真っ赤に染まったシーツは、苺の刺繍の白いハンカチと同様に、デズデモーナの貞節のあかしでなくてなんであろう。

## 盗まれたハンカチのバーレスク

イヤゴーは、デズデモーナに恋するロダリーゴに希望をもたせながら、「おれたちが使うのは知恵であって、魔法じゃない」（二幕三場）と言うが、人物たちを動かすのはイヤゴーの悪知恵ではない。「空気のように軽い」ハンカチなのだ。

デスデモーナの手を離れたハンカチは強い魔力をもった生き物のように、ハンカチを手にした人をオセロとデスデモーナの運命の輪に巻き込み、残酷な模様を織りあげてゆく。苺の模様のハンカチがなかったら、イヤゴーの悪知恵は破綻していたはずだ。

ハンカチは六人の手に触れる。オセロ、デズデモーナ、エミリア、イヤゴー、キャシオー、ビアンカの六人は、ハンカチを手にしたために、愛で始まり死で終わる物語に引きずり込まれる。オセロ、デズデモーナ、エミリアの三人は死に、イヤゴーとキャシオーは瀕死の重傷を負い、ビアンカは牢獄につながれる

キャシオーはデスデモーナと会い、復職のために力添えを頼む。デスデモーナと別れたキャシオーは、ビアンカに出会う。キャシオーはデスデモーナのハンカチを取りだしてビアンカに頼む。「この模様を写してくれないか。」自分の部屋に落ちていたハンカチの模様が気にいり、いずれわかる持ち主に返すまえに、写しをとっておきたいと思ったのだ。

ビアンカ　まあ、キャシオー、だれに貰ったの？
新しい恋人からの贈り物ってわけね。
寂しい想いをさせられたわけがわかったわ。
そういうことだったのね？　なるほど、なるほど。（三幕四場）

ハンカチを手にしたビアンカは、ハンカチの主に嫉妬におぼえる。ほったらかしにされ寂しい思いをさせられていたのは、キャシオーに新しい恋人ができたせいなのだ。ハンカチがそのなによりの証拠。ビアンカは、「自分の部屋に落ちていた」というキャシオーのことばを信じない。

キャシオーは、女といるところをオセロに見られたくないといってビアンカを追いかえす。ここで、キャシ

オーとビアンカの心理的な距離はぐっと遠くなる。

キャシオーとビアンカが退場すると、オセロとイヤゴーが登場する。イヤゴーはオセロに、デスデモーナがキャシオーに抱かれている場面とを想像させる。イヤゴーの毒がオセロの全身にまわり、オセロは「ハンカチ！　白状！　ハンカチ！　白状させてから首を絞めてやる」と叫びながら、卒倒する。

イヤゴーは悪知恵の総仕上げとして、一つの場面を設定する。イヤゴーとキャシオーが話しているのを、オセロに立ち聞きさせるのだ。話題はビアンカ。「あの淫売め、香水をぷんぷんさせやがって」と蔑むキャシオーのことばは、ビアンカにあてられたものだが、オセロはそれをデスデモーナについてだと勘違いする。それこそが、イヤゴーの目的であった。

そこへ、ビアンカがあらわれ、怒りをぶちまけながら、ハンカチをキャシオーに突っ返す。愛のエンブレムの苺が刺繍されたハンカチは、キャシオーとビアンカを決別に追い込む。

ビアンカ　どういうつもりよ、さっきのハンカチは？　うっかり受けとってしまうなんて、わたし馬鹿だったわ。わたしに模様を写せですって？　ありそうな話だわ、部屋に落ちていたので、持ち主がわからないなんて！　どうせどこかの遊び女からの贈り物なんだろう、その模様をなんでわたしが写しとらなければならないのよ。さあ、あんたの女、だれでも乗せる張り子の馬に返してやるんだね。どこで手に入れたか知らないけれど、だれが写しなんかとってやるものか。（四幕一場）

オセロはハンカチをデスデモーナに贈り、彼女の愛を勝ちえた。キャシオーは同じハンカチをビアンカに渡したために、ビアンカを失う。

オセロとイヤゴーは、ビアンカが苺の模様のハンカチをイヤシオーに突き返すのを、物陰から盗み見ていた。オセロはいう。「おお、間違いない、あれはおれのハンカチだ！」

イヤゴーはオセロにいう。「それにしてもどうです、奥さんをばかにして！　奥さんからいただいたハンカチを、なじみの淫売にくれてやったとは。」

オセロからデスデモーナへの愛の印であったハンカチは、イヤゴーの悪知恵のなかで、デスデモーナの不義のエンブレムになる。たかだか四角の布きれに、オセロは魔術めいた作り話しをし、法外な重みをもたせた。そのために、オセロはみずからハンカチという罠にはまってしまう。ハンカチをただの布切れとみなすことができないばかりに、オセロは妻殺しに突っ走る。

おのれの目で証拠を見るまではといっていたオセローは、ビアンカが手にするハンカチを目にしてデスデモーナの罪を確信する。オセロがデスデモーナを毒殺してやるとわめくと、イヤゴーは、毒殺ではなく絞め殺すように助言する。

「毒はおよしなさい。ベッドのなかで絞め殺すのです。奥さんが汚したそのベッドのなかで。」

オセロは同意する。「よし、それがいい。その因果が気に入った、それでいこう。」（四幕一場）

二度までも、写しをとられるのを拒まれたハンカチ。その後、ハンカチは舞台から姿を消す。ハンカチが舞台にあらわれることは二度とない。だが、ハンカチに触れた人間の心に深く刻まれ、人間を破滅し続ける。

エジプト女がオセロの母に渡したハンカチは諸刃の剣だった。愛をつかさどることもできるし、死にいたらしめることもできる。デスデモーナはオセロに殺され、ハンカチを拾ったエミリアも夫に殺され、キャシオーからハンカチを渡されたビアンカも破滅する。

## 名誉の殺人

オセロから冷たくされ生きる望みを失ったとき、デスデモーナは、母の世界を思い出す。そして、自分を、母の小間使いだったバーバラに重ねあわせる。

バーバラの恋人はバーバラを捨てた。そのために、バーバラは頭がおかしくなった。バーバラは「柳の歌」が好きで、その歌をうたいながら死んでいった。デスデモーナは、髪をほどきながら、「柳の歌」を歌う。いまは、バーバラの悲しみが痛いほどよくわかる。恋人に捨てられ狂気の淵においやられたバーバラは、デスデモーナのいまの姿だ。

オセロはデスデモーナがハンカチをなくしたことを、まるで名誉を失ったかのように解釈する。ハンカチはデスデモーナの罪の動かぬ証拠。オセロはデズデモーナの首を絞めて殺すまえに、こう言う。「おれは見たのだ、やつがハンカチを手にしているのを。ええい、この嘘つきめが！　おれのこころを石にする気か、生け贄を捧げるつもりでいるこのおれを、ただの人殺しにしようというのか。おれは見たのだあのハンカチを。」（五幕二場）

デズデモーナが不義を犯していなければ、オセロの行為は名誉の殺人ではなく、ただの殺人になってしまう。

五幕二場、エミリアがオセロの寝室のドアを激しく叩く。室内では、オセロに首を絞められたデスデモーナがベッドに横たわっている。エミリアは、キャシオーがヴェネツイアの若者ロダリーゴを殺したことを将軍に知らせにやってきたのだ。実際には、イヤゴーがロダリーゴを使ってキャシオーを殺させようとしたのだが、逆に刺されてしまったので、イヤゴーは奸計がばれるのを恐れてロダリーゴを刺し殺した。そして、闇夜にまぎれてキャシーを刺して逃げたのである。

オセロの寝室に入ったエミリアは、ベッドのカーテンのかげから聞こえる呻声を耳にする。カーテンをあけると、かすかに息をするデスデモーナが横たわっている。

エミリアが「ああ、だれです、こんなことをしたのは？」と聞くと、デズデモーナが消えいるような声で答える。「だれでもない、このわたしよ、さようなら、わたしの優しい主人によろしくね、ああ、さようなら。」そういいながら、デスデモーナは息絶える。

「人殺し！」と叫ぶエミリアの声に応えて、オセロの前任者で、キプロス島総督モンターノと、ヴェネツイア公爵の親書を携えてキプロス島に到着したばかりのグレシアーノ（ブラバンショーの弟）とイヤゴーがかけつける。デスデモーナはベッドのうえに死んで横たわっている。

グレシアーノはデスデモーナの父が娘の結婚を悲しむあまり亡くなったが、この痛ましい光景を目にせずにすんだのは、せめてもの慰みだと語る。

オセロは妻を殺したわけを語る。

痛ましい光景だ、だがイヤゴーがすべて知っています。
妻はキャシオーと恥ずべき行為を重ね、
キャシオーも罪を白状しました。
しかも、妻はやつのみだらな所業を嬉しがってか、
愛のしるしの品まであたえた。あろうことか
わたしのあれへの贈り物をです。やつがそれを手にしているのを
この目で見たのです。それは一枚のハンカチで、
昔、父が母にあたえた思い出の品なのです。（五幕二場）

エミリアはすべてを悟る。イヤゴーに渡したハンカチがキャシオーの手に渡り、それを証拠に、オセロが妻の不貞を確信したことを。エミリアはオセロに、あのハンカチはたまたま自分が見つけてイヤゴーにやったのだと白状する。それから、罪のない妻を殺したオセロを「人殺し、間抜け」と罵倒する。エミリアは「あんなつまらないものを、どうしてと思うほど真剣な顔つきで、しつこく盗んでこい」と夫に懇願されたと告白する。

ハンカチをめぐる陰謀の真相が露見したいま、ハンカチからは魔力がみるみる消え失せ、ただの「つまらない」ハンカチになりさがる。こんなつまらない物ために、かくも痛ましい悲劇が生じた。その愚かさに身を切られる思いをするのは、ほかならぬオセロである。

オセロはイヤゴーに剣を向けるが、モンターノに奪われる。そのすきに、イヤゴーはエミリアを刺し、逃げ

る。エミリアはデスデモーナのように、「柳の歌」を歌いながら、死んでゆく。

ブラバンショーの親族ロドヴィーゴがイヤゴーをひったてて寝室に姿を見せる。オセロは隠しもっていた短剣でイヤゴーを襲い、傷を負わせる。ロドヴィーゴが「ああ、オセロ、あれほどりっぱな将軍であったのに、憎むべき部下の罠にかかったいまのあなたを、なんとお呼びしたらよいか」と悲痛な声をあげると、オセロは答える。

いや、なんとでも。
名誉の人殺し、とでも呼んでいただきたい。わたしのしたことは、
憎しみゆえではなく、すべて名誉のためだったのです。
（五幕二場）

妻を殺してまで守ろうとしたオセロの名誉とはいったい何だったのか。

イヤゴーはキャシオーにむかっては、「名誉なんて人間が勝手に作りだしたいかさまもの、それだけの業績がなくたって入ってくるし、不行跡をしなくたって出てゆく」（二幕三場）と語るが、いっぽうで、オセロにたいしては、人間にとっていかに名誉が大切であるかを説いた。「名誉というものは、将軍、男女を問わず、魂にとっては一番の宝です」（三幕三場）。イヤゴーの二枚舌は、名誉についての持論からもわかる。オセロとデスデモーナに全身全霊でもって忠誠（honest）尽くすかに見せて、その実、背後では、二人の破滅を謀っ

ていた。イヤゴーは劇の冒頭でロダリーゴにむかって「おれは見かけのおれとはちがうんだ」と自慢するが、イヤゴーの二枚舌を見抜くことのできる者はだれもいなかった。妻エミリアでさえ、夫のほんとうの正体を最後まで知らなかった。ロダリーゴは、デスデモーナをものにしてやるというイヤゴーのことばを信じて全財産を使い果たしたあと、イヤゴーに騙されていたことに気づくが、気づいたとたんイヤゴーに殺されてしまう。

当時は、夫は不貞を働いた妻を処罰する権利をもっていた。エリザベス一世の父ヘンリー八世は、不貞を理由に、第二番目の妻アン・ブーリン（エリザベスの母）と第五番目の妻キャサリン・ハワードを不貞を理由に処刑している。キャサリン・ハワードの場合は罪が確認されたが、アン・ブーリンの場合はぬれぎぬであった。当時、この二つの事件を批判する者はいなかった。王の行為に異議を唱えることなどできなかった時代だった。

## 血に染められたシーツ

イヤゴーの二枚舌に操られたオセロは、デスデモーナの不義を信じこみ、「名誉の殺人」を犯した。妻の不義の証拠はたった一枚のハンカチ。デスデモーナは夫からの贈り物であるハンカチをなくしたが、なくなったものは、なくなったもの、オセロがそう考え、ハンカチに執着しなければ、妻殺しに走らずにすんだであろう。無実の妻を絞め殺したことに気づいたオセロは、みずからを短刀で刺し、デスデモーナに口づけしながら、息絶える。

ロドヴィーゴは、イヤゴーに「ええい、スパルタ犬、苦しみも飢えも荒波もおよばぬ残忍なやつ、見るがいい、このベッドのうえの悲惨な光景を、きさまの仕業だぞ、これを見れば目もつぶれよう」といいながら、血

塗られた現場をイヤゴーの鼻先に突きつける。

オセロの血が、まっしろな新婚のシーツに赤い模様を染めあげている。血染めのシーツは、苺の刺繍のハンカチの大きくなったもの。オセロのハンカチの刺繍糸は、オセロの話を信じれば、乙女のミイラの心臓で染めあげたものだという。いま、オセロのシーツは血しぶきをあげるオセロの心臓の血で染めあげられている。息絶えたオセロとデスデモーナを包む血染めのシーツは、ふたりの遺骸を包む経帷子となる。聖母マリアの白いリネンがイエス・キリストの遺骸を包む聖骸布となったように。

デスデモーナは息をひきとるまえ、オセロを許すことばをエミリアに残している。「さようなら、わたしの優しい主人によろしくね。」古い賛美歌をきれぎれに歌いながら、川底にしずんでいったオフィーリアのように、デスデモーナの最後のことばに、救いを見ずにおれない。

優しく慎ましく、友キャシオーを命をはってまで復職させようと努力したデスデモーナ。救い主イエス・キリストにも似たデスデモーナではないか。キャシオーは、キプロス島に到着したデスデモーナを迎え、歓迎の辞を述べ、そのなかで、「天使にも似たデスデモーナ」と讃えた。天使にも似たデスデモーナには、魔法のハンカチのように、人を魅了し、金縛りにする魅力があったようだ。デスデモーナを愛した人たち、父ブラバンショー、夫オセロ、エミリア、キャシオー、ロダリーゴはみな、最後に死ぬ。愛と死はつねに隣り合わせ、デスデモーナを愛した人たちはみな、運命的な死をむかえる。

『オセロ』ほど明確に人間の心をむしばむ嫉妬の恐ろしさを描ききった作品をわたしは知らない。

エミリアは、振り子のようにゆれる夫の心理状態に苦しむデスデモーナに、現実主義者らしい洞察力をもっ

て、人間の嫉妬について語る。

嫉妬深い人は、原因があるから嫉妬するのではなく、嫉妬深いから
嫉妬するのです。嫉妬というものは、
みずからはらんでみずから生まれる化け物です。（三幕四場）

デスデモーナは祈る。「そのような化け物がオセロのこころにとりつきませんように。」このことばは、劇を観終わったすべての人の願いでもあろう。

『オセロ』には、オセロとデスデモーナ、イヤゴーとエミリア、キャシオーとビアンカの三組のカップルが登場するが、三組みの男女の関係は非常によく似ている。男たちは三人とも、女とは貞淑な天使か娼婦かのどちらかにすぎないと考えている。天使でないのなら、娼婦にちがいないと考え、短絡的な女性観を持っている。妻を娼婦とののしるオセロと、ビアンカを娼婦扱いしてはばまらないキャシオーは、同じ穴のむじなだ。高潔な将軍とヴェネツイア人に称えられたオセロは、部下の二枚舌にやすやすと騙され、妻を殺害した。イヤゴーは妻エミリアがオセロとキャシオーと通じていると自分を信じ込ませ、妻エミリアを娼婦あつかいし、二人にたいする憎しみの動機づけをしているが、それがほんとうかどうかは、彼にとってたいした問題ではない、自分がそう考えていることが重要なのだといってはばからず、動機なき悪事を弁護している。

## チンティオ作『百話集』

『オセロ』の下敷きになった作品は、一五六五年に、ベネツィアで出版されたジラルディ・チンティオ作『百話集』の第三章第七話にある短い物語である。『オセロ』の筋書きが『百話集』に似ていることから、シェイクスピアはこの本を原書で読んだか、あるいは現存しないが、英訳本があり、物語の筋を知っていたと思われる。あらすじは、次ぎのようなものである。

デズデモーナにあたる女性の名は、ディズデモーナ。他の登場人物には名があたえられていない。ムーア人の将軍に解任される小隊長は登場するが、ディズデモーナに復職を頼むことはない。ロダリーゴにあたる人物は登場しない。舞台はベネツィア。ディズデモーナは親の反対をおしきってムーア人の将軍と結婚する。将軍の旗手は、彼女に横恋慕し、ディズデモーナがなびかないとわかると、憎しみを募らせる。ディズデモーナが三歳になる旗手の女の子をあやしているとき、旗手はディズデモーナのハンカチを盗む。旗手の妻は夫を恐れて夫の盗みを見てみぬふりをする。旗手は、盗んだハンカチを小隊長のベッドのなかに押し込む。小隊長はハンカチを見つけ、持ち主のディズデモーナに返そうと、ムーア人の屋敷の裏口から入ってゆく。だが、ムーア人が姿を見せたので逃げる。ある日、ムーア人と旗手は、小隊長の家のまえを通りかかる。ひとりの女性の姿が窓越しに見える。小隊長の恋人とは別の女性である。女はディズデモーナのハンカチの模様を写しとっていた。ムーア人は妻が小隊長と通じていた、ハンカチはその証拠だ信じこみ、嫉妬に燃え、妻の殺害を企てる。旗手はそれに手を貸す。ムーア人は、砂を詰めたストッキングでディズデモーナを打ち殺したあと、家屋を破

損させて事故死に見せかける。ベネツィアの法廷に召喚されたムーア人は罪を告白することを拒む。彼は追放されるが、ディズデモーナの親類の者に殺される。旗手は別件で逮捕され、拷問を受けたあと、内臓破裂で死亡する。

チンティオの原話では、ディズデモーナのハンカチはムーア人の夫から贈られたもので、「ムーア風のとても繊細な刺繍がほどこされ、ディズデモーナはそれを大事にしていた」と語られており、悲劇を誘発する小道具となっているが、ディズデモーナの貞節のシンボル、あるいはディズデモーナの不義の証拠になっているわけではない。

この章では、次ぎの論文から多くの示唆を得た。

Lynda Boose, "Othello's Handkerchief: 'The Recognizance and Pledge of Love, in *Critical Essays on Shakespeare's Othello*, ed. Anthony Gerard Barthelemy (New York: Maxwell Macmillan International, 1994), pp. 55–67.

## 注

(1) これら三つの作品は、*Dynasties: Painting in Tudor and Jacobean England 1530–1639*, ed. Karen Hearn (London: Tate Publishing, 1995, fig. 32: p. 71, No. 27: p. 70, No. 49: p. 97) に掲載されている。

(2) Jane Ashelford, *A Visual History of Costume, The Sixteenth Century* (London: BT Batsford, 1983), No. 62 & No. 63.

(3) *Cal. Span.*, I, Elizabeth (1558–1567), 57–58.

(4) *CSP. Foreign*, IV, Elizabeth (1561–1562), 158.

(5) *Cal. Span.*, I, Elizabeth (1558–1567), 113.

(6) *CSP. Foreign*, III, Elizabeth (1560–1561), 348.

(7) *CSP. Foreign*, III, Elizabeth (1560–1561), 348–349.

(8) Kukita Naoe, "Symbolic Grain and Symbolic Bread: Relationship Between the Ancient Grain Goddes and the Virgin Mary," *Magistra*, 3. No. 1 (Summer, 1997), vol. 1, p. 137.

(9) Elizabeth I (The Sieve Portrait), by Quentin Metsys the Younger (1543?–1589), Pinacoteca Nazionale, Siena, reproduced in *Dynasties, Painting in Tudor and Jacobean England 1530–1630*, No. 40, p. 85: Gail Kern Paster, *The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England* (New York: Cornell University Press,), pp. 50–51. 幾つか異なった「篩を手とする女王」が現存する。

(10) Norbert Elias, *The Civilizing Process*, trans. Edmund Jephcott (Oxford: Black Well, 1994).

(11) Diana O'Hara, "The Language of Tokens and the Making of Marriage," *Rural History*, Vol. 3 Number 1 (April, 1992), pp. 1–3.

(12) *Elizabeth: The Exhibition at the National Maritime Museum*, ed. Susan Doran (London: Chatto & Windus, 2001), p. 106.

(13) Gail Kern Paster, "Leaky Vessels: the Incontinent Women of City Comedy," in *The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England* (Ithaca: Cornel University Press, 18995, p. 25.

(14) John White, Thomas Harriot, *A Brief and True Report of the new Found Land of Virginia* (1590), reprinted (Mineola: Dover Publications, 1972).

(15) Richard Haklulyt, *The Principal Navigations Voyages and Discoveries* (1589).

(16) Ion Leo Africanus, *A Geographical Historie of Africa*, (London: Jmpennsis George. Bishop, 1600).

(17)　Iohn Leo a More, borne in Garnada and brought up in Barbarie, *A Geographical Historie of Africa* (London: Jmpensis Geog. Bishop, 1600), pp. 142–143.

(18)　Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy* (Oxford: Lohn Lichfield and James Short, 1621)., 3, 3, 2, 1.

(19)　初夜に新婦が用いた着物やシーツ。

(20)　アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、大修館書店、一九八四年、六一〇頁。

(21)　George Ferguson, *Signs & Symbols in Christian Art* (London: Oxford University Press, 1961), p. 38.

Abbreviations Used

Cal. Span. Calendar of State Papers in archives of Simancas, Elizabeth, ed. M. A. S. Hume.

CSP. Foreign Calendar of State Papers, Foreign Series.